

# 令和4年度 浦安市平和事業実施報告書



子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト 2022  
最優秀賞（市長賞）作品

浦安市 市民経済部 地域振興課



**令和4年度**

**浦安市平和事業実施報告書**

## - 目 次 -

はじめに .....	1
1 平和学習青少年派遣事業 .....	2
2 小・中学校平和学習事業 .....	6
3 横断幕及び電光掲示板での啓発 .....	12
4 千羽鶴の献納 .....	13
5 原爆展 .....	14
6 子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト2022 .....	15
7 黙とうの呼びかけ .....	18
8 国際平和デー記念行事 .....	18
9 平和シンポジウム ～私たちか平和のためにできること～ .....	21
10 「平和への願い」カレンダーの作成 .....	23
11 親子平和バスツアー .....	24
資料編 平和学習青少年派遣事業派遣生感想文 .....	25
非核平和都市宣言 .....	62

## はじめに

本市では、昭和60年3月29日に非核平和都市を宣言して以来、非核平和理念の市民への浸透と平和意識を高めることを目的に幅広い平和事業を行っています。

令和4年度は、8月に、新型コロナウイルスの影響などにより取りやめとなっていた「平和学習青少年派遣事業」を3年振りに実施しました。今回で16回目の派遣となり、市立中学校から選出された生徒18名を「浦安市平和使節団」として被爆地である長崎市に派遣しました。

また、市立小・中学校で浦安被爆者つくしの会のご協力のもと、「被爆体験講話等」と、学校内において被爆写真パネルを展示する「非核平和パネル展」を実施しました。

この他にも、「原爆展」や「“平和なまち”絵画コンテスト」、「平和シンポジウム」など、様々な平和事業を実施しました。

今後も、工夫を施しながら様々な平和事業を実施してまいりますので、御協力をいただければ幸いです。

結びに、本市の平和事業にご協力いただきました皆様に、御礼を申し上げます。

# 1 平和学習青少年派遣事業

## ■ 実施内容

次世代を担う青少年が、被爆の実相と平和の尊さを知り、戦争や核兵器のない平和な未来を築くことを目的に、市内中学生18名を原爆が投下された日に合わせて長崎市へ派遣しました。

長崎市では、「原爆資料館」や「被爆建造物等」の見学、「平和祈念式典」や、全国から集まった青少年との交流や相互理解を深める「青少年ピースフォーラム」に参加しました。

※派遣生の感想文は25ページ以降に資料編として掲載しています。

## ■ スケジュール（概要）

区分	日程	内容
第1回 オリエンテーション	6月25日 午前9時30分～正午	自己紹介、事業概要説明、浦安被爆者つくりの会による平和学習、アイスブレイクなど
第2回 オリエンテーション ・結団式	7月29日 午前10時～午後5時	派遣スケジュール説明、グループワーク、千羽鶴の作成、結団式（市長・教育長表敬訪問）、講演の聴講など
長崎派遣	8月7日～8月10日	原爆資料館・平和公園見学、青少年ピースフォーラムの参加など
報告会	8月28日	平和シンポジウムのイベント内で報告

## ■ 派遣生（浦安市平和使節団） 市内中学生18名

学校名	氏名	学年	学校名	氏名	学年
浦安中学校	田川 翔大	3年	美浜中学校	恵平 心結	2年
	吉宗 華蓮	3年		田村 久弓	2年
堀江中学校	村山 煌貴	3年	日の出中学校	姫井 心暖	2年
	大畑 宗大	3年		深川 瑠花	2年
見明川中学校	新名 修	3年	明海中学校	谷田部 颯太	2年
	太田 碧衣	3年		平田 くらら	2年
入船中学校	長嶋 麗	2年	高洲中学校	鬼澤 まりな	2年
	安藤 花	2年		勝又 梁	2年
富岡中学校	石井 伊吹	2年	引率：地域振興課職員 3名 看護師 1名（長崎市内のみ）		
	中鉢 くるみ	2年			

## ■ オリエンテーション（事前学習）

長崎市へ派遣する前に事前学習を2回行いました。広島市・長崎市に落とされた原爆のことや、戦争についての学習、平和シンポジウムの準備、市長・教育長との結団式などを実施しました。

### ◇ 第1回オリエンテーション



自己紹介



浦安被爆者つくしの会による  
平和学習



アイスブレイク

### ◇ 第2回オリエンテーション



千羽鶴作成



結団式



ウクライナから避難された方による  
講演



朗読劇練習

## ■ 派遣行程表

日程	時間	内容
8/7 (日) 1日目	7:15	浦安市役所集合
	7:30	市のバスで、羽田空港へ
	9:40	羽田空港発 (機内で昼食)
	11:30	長崎空港着 (リムジンバスで移動)
	13:15	長崎駅前着
	13:25	ホテル着
	14:30~15:30	グラバー園見学 (路面電車で移動)
	16:00	ホテル着 夕食まで自由時間
	18:30	夕食 (ホテルにて) / 明日の確認
	22:00	就寝
8/8 (月) 2日目	6:30	起床
	7:00	朝食
	8:20	ホテル出発 (路面電車で移動)
	9:00~11:00	班別フィールドワーク (平和案内人により、平和公園周辺の被爆建造物等を巡る)
	11:10~12:15	原爆資料館見学
	12:30	昼食
	14:00~18:00	青少年ピースフォーラムへの参加 ①被爆体験講話 ②平和学習フィールドワーク (被爆建造物や慰霊碑などの見学)
	18:30	ホテル着
	19:00	夕食 (ホテルにて) / 明日の確認
	22:00	就寝



行きの飛行機内



グラバー園



班別フィールドワーク





路面電車

日程	時間	内容
8/9 (火) 3日目	6:30	起床
	7:00	朝食
	8:30	ホテル出発
	9:30	青少年ピースフォーラムへの参加 (午前) ③平和祈念式典に参列 (2班に分かれて、平和公園または、出島メッセ長崎にて参列)
	12:00	昼食
	14:00~16:00	青少年ピースフォーラムへの参加 (午後) ④平和学習 意見交換 (全国から集まった青少年とテーマに沿った意見交換を行い、これからの平和について考える)
	17:30	ホテル着
	18:30	夕食 (ホテルにて) / 研修
	22:00	就寝
8/10 (水) 4日目	6:30	起床
	7:30	朝食
	8:30~10:15	長崎県立歴史文化博物館・立山防空壕見学
	11:40	長崎空港着・自由行動 (昼食)
	13:30	長崎空港発
	15:15	羽田空港着
	17:00	浦安市役所到着・解散



千羽鶴献納 (平和記念公園)



青少年ピースフォーラム



立山防空壕

## 2 小・中学校平和学習事業

### ■ 実施内容

次第に風化していく原爆・戦争の記憶を今にとどめ、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを若い世代に伝えるため、小・中学生に対し、「被爆体験講話等」及び「非核平和パネルの展示」を実施しました。

「被爆体験講話等」では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じ、対面式または、DVDにより実施しました。対面式では、浦安被爆者つくしの会<sup>※</sup>による講話や朗読劇を行いました。

DVD の内容は、 ①浦安市の非核平和事業の紹介 ②浦安被爆者つくしの会による被爆体験講話 ③浦安市平和使節団 OB・OG による平和メッセージです。

### ■ 実施校

- ・ 被爆体験講話等 20 校/26 校中 学習人数 1,526 人
- ・ 非核平和パネルの展示 25 校/26 校中

#### ※浦安被爆者つくしの会

広島市又は長崎市の原爆被爆体験者（2世会員含む）などが平和諸活動に参加し、会員の健全なる親睦と友愛の絆を築いて発展していくことを目的として、平成5年に発足した団体。

会員の高齢化が進む中で、核の恐ろしさや平和の尊さを、青少年をはじめとする市民に対して継続的に伝え、市民の平和意識の高揚に貢献している。

特に市が推進する非核平和事業について深く認識し、平成13年度から毎年市と共に、自らの被爆体験を語る被爆体験講話を市内の小・中学校で実施している。

## 小学校（令和4年度）

No.	学校名	被爆体験講話等				非核平和パネルの展示
		方法	実施日	学年	学習人数	貸出期間
1	浦安小学校	DVD	12月6日	6	42	12月5日～12月9日
2	南小学校	DVD	1月 18日 19日 23日	6	125	1月16日～1月20日
3	北部小学校	対面式	1月19日	6	98	1月19日～1月27日
4	見明川小学校	対面式	11月1日	6	90	9月20日～9月27日
5	富岡小学校	対面式	2月2日	6	40	1月30日～2月3日
6	美浜南小学校	対面式	11月18日	6	47	12月5日～12月9日
7	東小学校	対面式	1月13日	6	98	1月11日～1月17日
8	舞浜小学校	DVD	2月28日	6	84	2月6日～2月10日
9	美浜北小学校	対面式	1月20日	6	29	1月16日～1月23日
10	日の出小学校	対面式	2月7日	6	67	2月6日～2月10日
11	明海小学校	実施なし				1月30日～2月3日
12	高洲小学校	対面式	1月16日	6	78	12月14日～12月20日
13	日の出南小学校	対面式	1月24日	6	78	1月23日～1月27日
14	明海南小学校	対面式	9月7日	6	56	9月5日～9月9日
15	高洲北小学校	DVD	3月9日	6	103	12月5日～12月9日
16	東野小学校	DVD	1月10日	6	109	2月6日～2月10日
17	入船小学校	DVD	2月3日	6	43	1月30日～2月3日
合計					1,187	

## 中学校（令和4年度）

No.	学校名	被爆体験講話				非核平和パネルの展示
		方法	実施日	学年	学習人数	貸出期間
1	浦安中学校	実施なし				9月5日～9月9日
2	堀江中学校	実施なし				10月3日～10月7日
3	見明川中学校	DVD	3月7日	2	80	10月24日～10月28日
4	入船中学校	DVD	3月6日	3	97	9月12日～9月16日
5	富岡中学校	実施なし				9月12日～9月16日
6	美浜中学校	DVD	7月19日	3	92	実施なし
7	日の出中学校	DVD	2月10日	3	70	11月7日～11月14日
8	明海中学校	実施なし				10月11日～10月14日
9	高洲中学校	実施なし				9月20日～9月30日
合計					339	



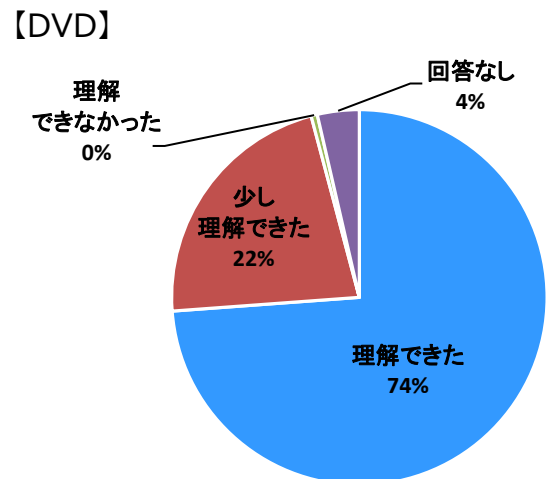
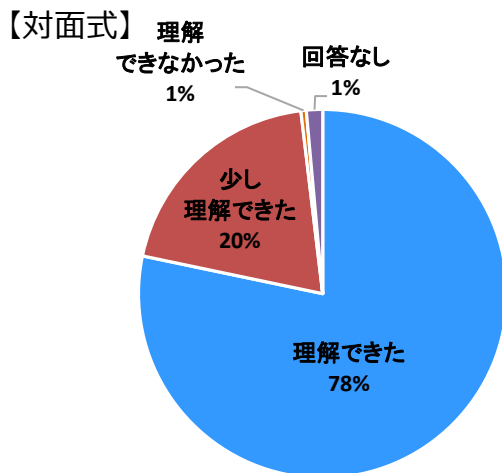
浦安被爆者つくしの会 朗読劇の様子



DVDの映像

## ■ 被爆体験講話アンケート結果

### 1. 今日のお話の内容は理解できましたか。



### 2. 今日の内容について、「ここが良かった!」「こうして欲しかった!」などあれば教えてください。

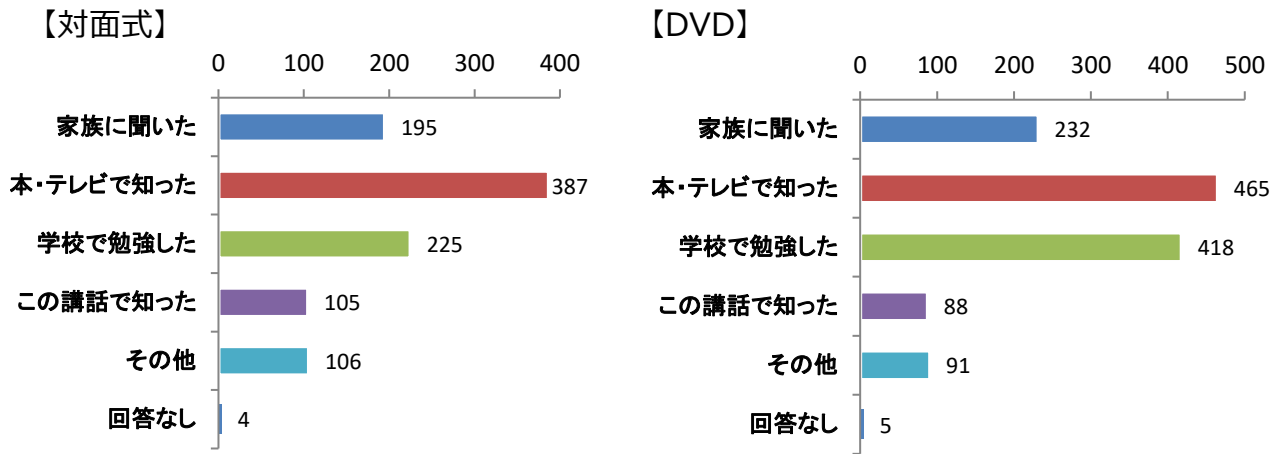
#### 【対面式】

- ・ 覚えてほしいもの、知ってほしいものの時に声の調子や大きさをかえて聞きやすく良かった。
- ・ とても残酷で、怖いことがわかって、もう絶対に起きてほしくないなとあらためて思えた。
- ・ 学校や塾では、原爆のことについてはあんまりくわしく勉強しないので、話がきけて理解が深まった。

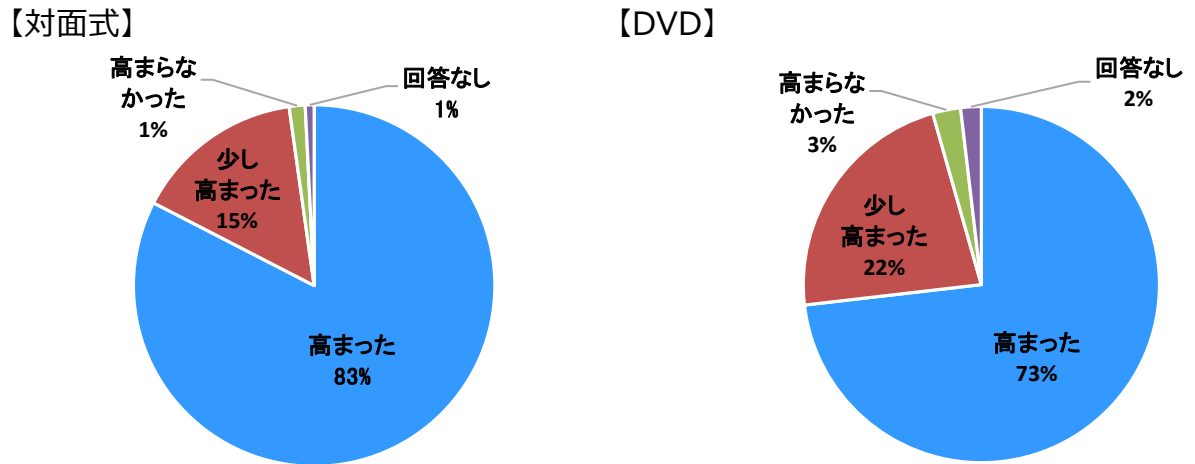
#### 【DVD】

- ・ リアルな被爆者の体験談を知れてよかった。かなり苦しい表現があつてつらいと思ったけど本当の話を聞きたかったのでよかった。
- ・ 実際に体験された人のお話や、広島、長崎に行かれたOB、OGの方々のお話を聞いて良かった。
- ・ 挿し絵や写真があつたのが良かったです。また、戦争の臨場感も伝わってきました。

3. 広島市、長崎市に原爆が投下されたことをどのようにして知りましたか。  
(複数回答可)



4. 平和への思いが高まりましたか。



#### 4. 平和のためにあなたができること、感想など、ご自由に書いてください。

##### 【対面式】

- ・ けんかをしてしまった時は、話し合いで解決するようにする。「やられたらやり返す」をくり返すと、どんどんエスカレートして行って、それが原因で、戦争が起きているんだなあと思った。これからも、戦争のない世の中にしたいと思った。
- ・ 私たちは今とても幸せな時間を過ごせているのが分かった。今、この時間ウクライナとロシアが戦争をしていると考えると「平和な世の中にはいつなるのだろうか。」と考えてしまう。ロシアがもし「核兵器」を使ったら、広島や長崎と同じことにウクライナがなってしまうかもしれない。日本人だからこそ、それが分かる。だから、被爆者の人達はみんな、ロシアとウクライナの戦争をやめてほしいとねがっているはずです。
- ・ ぼくのひいひいおじいちゃんが広島の前爆で亡くなり、前爆の怖さは、何となく知っていて、この講話を聞いて、いろいろ大変なことを知った。この講話で、やっぱり戦争は、怖いし、前爆はおそろしいと思った。今、自分なりのできることを見つけて、平和を、みんなで作っていきたいと思う。
- ・ 今日の話聞いてすごく悲しくなったけど、前爆が起きた時、その時の苦しさ、悲しみを知ることは話だけでは理解することはできないのだと思った。これは日本だけじゃない。今の時代に住んでいる私たちは、あの苦しみを全く分かっていない。それを経験した人たちは、その時のことをいつまでも忘れることはできないのではないかと思った。人はどれだけ自分勝手なのかを改めて考えさせられた。今日は貴重な体験だった。

##### 【DVD】

- ・ 平和って難しい。まず平和の定義が「コレ！」というものがない。きっと僕の思う平和と、隣の人が思う平和と、世界の人が思う平和には少しばかり違いがあると思う。
- ・ この先世界をひっぱっていく世代として、そのあとの子どもに教えたりすることだと思う。今回のお話をきき、前爆のおそろしさを再確認、後世に伝えていきたいと思った。
- ・ 戦争などの争いごとは話し合いの最終段階だと思っているから、なぜ話し合いで終わらせることができなかったのか、社会の学習で学んでいきたいと思った。

### 3 横断幕及び電光掲示板での啓発

#### ■ 実施内容

「核兵器のない平和な世界を」と記した横断幕を浦安駅前歩道橋、新浦安駅北口歩道橋、舞浜駅北口歩道橋に掲出しました。また、市役所電光掲示板で啓発しました。

#### ■ 期間

横断幕・電光掲示板：令和4年7月12日～9月13日

#### ■ 場所

- ・横断幕：浦安駅前歩道橋、新浦安駅北口歩道橋、舞浜駅北口歩道橋
- ・電光掲示板：市役所電光掲示板



浦安駅前



電光掲示板



## 4 千羽鶴の献納

### ■ 実施内容

市民より、平和の千羽鶴を募集し、広島市・長崎市へ献納しました。

### ■ 募集期間

令和4年6月15日～7月15日

### ■ 献納数

65,400羽



広島に献納した千羽鶴



長崎に献納した千羽鶴



## 5 原爆展

### ■ 開催内容

原爆の悲惨さ等を伝えることを目的に、被爆写真の展示や原爆に関するDVD視聴コーナー等を設置しました。

また、一部の期間において、浦安被爆者つくしの会の協力のもと、来場された市民に対し、展示物等の説明をしました。

### ■ 開催期間・時間

令和4年7月20日～8月31日（土曜日及び祝日を除く）

午前8時30分～午後5時

### ■ 開催場所

市役所1階市民ホール

### ■ 展示の内容

- ・ 平和と学びポスター（低学年・高学年用）
- ・ 原爆被害の概要、広島市・長崎市の被爆後の惨状写真など
- ・ 基町高校の生徒と被爆体験証言との共同制作による「原爆の絵」
- ・ 第五福竜丸被爆写真パネル
- ・ 「平和への願い みんなに届け！」カレンダー  
（子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト2021受賞作品掲載）
- ・ 原爆に関する絵本・DVD視聴コーナー
- ・ アンケート・クイズの実施
- ・ 「平和の木」メッセージボードの設置

原爆展の様子



## 6 子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト 2022

### ■ 実施内容

市内の小・中学生を対象に、「平和なまち」をテーマとした絵画を募集しました。

令和4年度は、これまでで一番多い162作品（令和3年度109作品）の応募がありました。

応募いただいた全作品は、市役所市民ホールで展示したほか、市公式ホームページにおいても掲載しました。

また、入賞作品6点は、平和事業の啓発イベント等で配布する啓発グッズや小・中学校で配布する平和カレンダーに印刷して活用しています。

応募資格：令和4年10月31日時点で6歳以上15歳以下の浦安市民

### ■ 実施期間

募集期間：令和4年8月1日～9月30日

展示期間：令和5年1月17日～1月31日



展示会の様子



啓発グッズ（メモ帳）



表彰式の様子

受賞者作品 ※年齢は令和4年10月31日時点



最優秀賞（市長賞） わたなべ 渡辺 あおい 葵さん（9歳）

【作者のメッセージ】

パフェはどこをどうやって食べても美味しくてワクワクします。地球もどの国や場所もみんな仲良く、笑顔であふれていて平和でいてほしいなと思って書きました。

世界中の子どもたちや生き物で、協力しながらすてきで平和な地球になるように、自然も笑顔もいっぱいにしたいです。私は浦安市が大好きなのでパフェの中にツツジの花とイチヨウの葉を入れました。



優秀賞 くどう 工藤 ひなた 陽奈多さん（12歳）

【作者のメッセージ】

世界中の皆が、平等で楽しく暮らし、自由に夢や理想を追えるような、平和な町になってほしい、という願いを込めて、笑顔が飛び交う、明るい作品にしました。



優秀賞 ライト さら エリザベスさん（12歳）

今、自然災害や戦争が世界あちらこちらで起っているニュースが毎日流れます。

私のお姉ちゃんは、ウクライナから逃げてきた女の子と中学で友達になり、ウクライナの美しい自然や、きれいな街並みが壊されたそうです。

私はこの絵に込めた思いとして“美しい自然を残したい”“友達や家族と幸せに暮りたい”という、このシンプルな気持ちがみんなの幸せだということであらわしました。



入賞 <sup>おがわ ゆり</sup> 小川 裕莉 さん (13歳)

【作者のメッセージ】

戦争は悲しく、苦しいもので、それを皆（色々な国の人）で、平和な世界に彩っていきたいという思いを込めました。

その思いを表現するために世界を彩っている筆の部分色々な国旗が描かれているデザインにしました。



入賞 <sup>みなかた ゆうた</sup> 南方 雄太 さん (9歳)

【作者のメッセージ】

地球のみんなが病気や戦争に苦しまないような平和な毎日を送ってほしい。国旗の気球は世界を表し、地球をみんなで守っていきたくてかきました。



入賞 <sup>もりもと そうた</sup> 森元 湊太 さん (10歳)

【作者のメッセージ】

この絵を描いている時ちょうど終戦記念日をむかえました。でもまだたくさんの国が争っているの、平和になつてほしいという願いをこめてこの絵を描きました。

## 7 黙とうの呼びかけ

原爆死没者のめい福と核兵器の廃絶を願い、広島市・長崎市の原爆投下日における1分間の黙とうの実施について、広報うらやす（8月1日号）、市公式ツイッター、市役所電光掲示板で市民にお願いするとともに、市役所の庁内放送で、来庁者や職員に対して呼びかけを行いました。

## 8 国際平和デー記念行事

### ■ 実施内容

「国際平和デー」とは、世界の停戦と非暴力の日として国連が定めた、平和の記念日（毎年9月21日）です。本市においても、記念行事に賛同し、令和2年度から実施しています。

本市では、9月21日の午後0時30分頃に、市内にある大蓮寺や協力ホテル、学校において平和の鐘を鳴らし、市民の方に、平和について考えていただくよう呼びかけました。また、令和4年度は、大型商業施設も参加しました。

### ■ 実施日時

令和4年9月21日 午後0時30分頃

### ■ 実施施設

No.	種別	施設名称
1	寺院	大蓮寺
2	市役所	浦安市役所
3	公立小学	公立小学校 17校
4	公立中学	公立中学校 9校
5	私立中学	東海大学附属浦安高等学校・中等部
6	公立高校	千葉県立浦安南高等学校
7	ホテル	ヒルトン東京ベイ
8	ホテル	オリエンタルホテル東京ベイ

No.	種別	施設名称
9	ホテル	浦安ブライトンホテル東京ベイ
10	ホテル	東京ベイ舞浜ホテル
11	大型商業施設	イオンスタイル新浦安
12	大型商業施設	MONA 新浦安
13	大型商業施設	アトレ新浦安店
14	大型商業施設	ニューコースト新浦安店
15	大型商業施設	ダイエー浦安駅前店

- ・大 蓮 寺：セレモニーを行い、午後0時30分より、住職、浦安被爆者つくしの会会員等が鐘を撞きました。
- ・ホ テ ル：午後0時30分より、60秒間を目安に、ホテル担当者がチャペルの鐘を鳴らしました。
- ・各 学 校：午後0時30分から午後1時の昼食の時間帯に、事業趣旨を説明後、長崎市の鐘の音源を流しました。
- ・大型商業施設：午後0時30分頃に、事業趣旨について放送しました。



大蓮寺



オリエンタルホテル東京ベイ



ヒルトン東京ベイ



東京ベイ舞浜ホテル



## 9 平和シンポジウム～私たちが平和のためにできること～

### ■ 開催内容

過去の戦争のことや、今世界で起こっていることを知り、平和のために何ができるか考えてもらうために開催しました。

なお、市公式YouTubeにて、シンポジウムの様子を視聴できます。



平和シンポジウム動画

### 【プログラム】

#### 第1部 令和4年度平和学習青少年派遣事業報告会

令和4年8月7日～10日に浦安市の青少年（中学生18名）を代表として、長崎に派遣された浦安市平和使節団により、派遣事業を通して学習したこと等を報告します。

【出演】浦安市平和使節団

#### 第2部 朗読劇「伝えたい あの日のことを」

原爆をテーマにした朗読劇を披露しました。

【出演】浦安市平和使節団、浦安被爆者つくしの会

#### 第3部 ウクライナから避難された方を交えたトークセッション

ウクライナから日本に避難された方より、母国での実体験や避難の状況についてお話いただき、平和使節団から質問などをするトークセッションを行いました。

【出演】ウクライナから避難された方（通訳あり）

浦安被爆者つくしの会会長、浦安市平和使節団

### ■ 開催日時

令和4年8月28日 午後1時30分～3時30分

### ■ 開催場所

市役所1階市民ホール

## ■ 来場者数

76人



第1部 平和学習青少年派遣事業報告会



第2部 朗読劇



第3部 ウクライナから避難された方を交えた  
トークセッション





## 11 親子平和バスツアー

### ■ 実施内容

昭和29年3月1日、太平洋のマーシャル諸島にあるビキニ環礁で、アメリカが行った水爆実験によって被害を受けた木造のマグロ漁船やその付属品、関係資料を展示している「東京都立第五福竜丸展示館」を見学しました。

また、戦中・戦後の人々の暮らしを実物展示した「昭和館」を見学しました。

移動中のバスの中では、浦安被爆者つくしの会から被爆体験のお話をいただきました。

### ■ 実施日時

令和4年8月30日 午前10時15分～午後4時

### ■ 見学先

- ・ 東京都立第五福竜丸展示館(東京都江東区)
- ・ 昭和館(東京都千代田区)

### ■ 参加者数

6組 15名 (保護者7名、子ども8名)

# 資料編

## ■ 平和学習青少年派遣事業派遣生 感想文

この度私は、浦安市の中学生を代表して、浦安市平和学習青少年派遣事業に参加し、被爆地である長崎市を訪問しました。そこで原爆の怖さ、戦争の恐ろしさについて学びました。今回は、この派遣事業で印象に残ったこと、大切だと感じたことについて話していきます。



まず1つ目は、原子爆弾というものの怖さです。この四日間という期間で1番印象に残っているのはもちろん、原子爆弾という言葉です。二日目に行った班別フィールドワークでは、平和案内人の方の案内で、原爆の被害を受けた大学や病院をまわりました。なかでも、原爆が実際に落とされた原爆落下中心地碑では、七十七年前の今日、原爆が落とされた場所にいると考えると、とても胸が痛くなりました。当時、その原爆が落とされた周辺は約三千度にまで熱くなり、沢山の人が被害を受けました。三千度というのは、太陽よりも熱く、火傷では済みません。皮膚が服のように腕から垂れて、被害を受けた人は、水に飛び込んでも、亡くなってしまったくらい怖いらしいのです。他にも、原爆の被害を受けた長崎医科大学では、当時の大学の様子や、授業の風景の写真などがありました。隣接していた長崎医科大学付属病院では、永井先生という有名な教授の写真や、研究した記録が記されたレポートなどがありました。その施設にいた人々が原爆で亡くなってしまったと考えると、とても怖かったです。

次に二つ目の印象に残ったことは、平和祈念式典です。実際に原爆が落とされた日の八月九日に行われた平和祈念式典では、長崎市長や、内閣総理大臣の岸田文雄さんの話があり、今でもその時の風景は頭に残っています。中でも、印象的だったのは、実際に七十七年前、原爆の被害を受けた方の訴えというものです。なぜ原爆は長崎に落とさなければならなかったのか、二度と戦争を起こしてはならないという被爆者の方の熱く、強い思いが伝わりました。他にも地域の小学校

の合唱団による合唱や、被爆者の会の方の合唱も、とても鮮明に覚えています。

そして三つ目は、長崎の方の温かさです。この平和学習を通して、1番話したかったのは、この温かさというものです。それはどういうものかという、二日目の平和案内人の方、ピースフォーラムのボランティアの方、被爆者のみなさんが目を背けたくくなるような原爆の現実や七十七年前のあの日のことを私達に伝えてくださったことです。辛いこと、悲しいことが沢山あるのに、私達に強い思いを伝えてくださったことはきっとこの先、忘れることはありません。そのくらい長崎の方々の熱く、強い、そして、世界中の人々へ伝えたい思いは私の胸に刺さりました。

最後にこの旅を通して何を1番伝えたいか、私達は二度と戦争を起こさないために何をすべきか、私の思い、考えを話します。やはり1番は、原爆や戦争の実態を自分で見て、調べて、感じることです。そしてその自分の感じた恐怖などを後世に伝えていくことが大切だと思います。そして三日目に行った青少年ピースフォーラムの時に話し合った、ケンカが起きる原因や起こさないためにどのようにすべきなのかを周りの友人や家族と話してみるのもとても良いと思います。私はどんなささいな事も話し合いで解決すべきだと思います。武力では何事も解決しません。そして是非紹介したいのは現在の長崎市長が平和祈念式典でおっしゃっていた「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。私は今でもこの言葉が頭に残っています。もう二度と戦争はしてはいけないということを後世に伝えていくべきだと思います。

この長崎平和派遣事業に私を参加させてくださった方々にたいへん感謝しています。ありがとうございました。そして、ウクライナ、ロシア戦争が1日でも早く終わることを祈っています。



浦安中学校 3年 よしむね かれん  
吉宗 華蓮

---

私は長崎に行った際、なかなか聞いたり見たりすることのできない「被爆」について学びました。学ぶときに大切にしていたことは、学校の代表で平和使節団としての自覚を持ち、体験したことを家族や友達などにしっかり伝えていくことです。

1日目は、移動がメインでした。初めての飛行機だったので、凄く楽しかったです！長崎に着いたあとは、「グラバー園」というところに行きました。グラバーさんが当時建てた家があり、当時の暮らしの様子がよくわかりました。外国の方というのもあり、日本とは違った昔の洋風の家で、とても綺麗でした。

2日目は、午前中に班ごとに分かれて、地域のボランティアの方と一緒に被爆されたところに行きました。私の班は、被爆した小学校をメインに周りまわりました。その小学校は今でも使われている、歴史ある小学校です。当時の小学校は、壁に模様がついていました。その模様は、上空から見たときに目立たなくするようしており、空襲に備えたものでした。常に些細なことでも備えており、学校に行くのも大変だと思いました。そして、小学校にはたくさんの千羽鶴があり、平和の少年像がたっていました。その中でも印象深く残ったのは、「嘉代子桜」です。当時被爆された嘉代子さんのことを思って、嘉代子さんのお母さんが植えた桜です。その嘉代子桜は今でも成長しており、とても意味のある桜です。私はこの桜を見たときに、亡くなった方々の思いが伝わってきて、このような悲惨な歴史を忘れてほしくないと感じました。班ごとに周ったあとは、原爆資料館に行きました。資料館には、長崎に落ちた原子爆弾のファットマンの原寸大がありました。原子爆弾の中の成分も書いてありました。他には、実際の被爆を受けた直後の人の写真が数多くあり、原子爆弾の実験の動画もありました。実際の写真を見た際は、とても見ていられないほど恐ろしく、いてもたってもいられなくなりました。実験の動画を見た際は、動画越しに暴風が来るように感じ、大きなキ





ノコ雲がたっていました。資料館に行ったあとは、青少年ピースフォーラムに参加させていただきました。参加した際、実際に被爆された方のお話を聞きました。「腕の皮膚が足まで垂れている人達が列になって歩いている」という話がとても印象に残っています。

3日目は、午前中に平和祈念式典に参加しました。被爆された人たちの合唱が1番印象に残っていて、胸が熱くなりました。そして午後は、青少年ピースフォーラムの人たちと各地域から来た平和使節団の方々と意見交換をしました。「ケンカや戦争の原因」「どうしたら戦争が起きないか」などのテーマでたくさんの意見を出し合いました。

このように1日1日の内容がとても色濃く、4日間で様々な体験をさせていただきました。目を背けたくくなるような戦争を小さな力かもしれませんが、私から発信していき今後の世代に伝えていきたいです。今この瞬間を生きていることに感謝し、1日1日を無駄にせず、大切にして過ごしていきたいです。



原爆資料館 ファットマン原寸大模型



平和祈念式典（平和公園）

私は、この長崎派遣を通して戦争の恐ろしさや平和の尊さを学んできました。

実際に長崎で見て、聞いて、感じたことはとても感慨深いものがありました。

長崎へ行き、2日目の班別フィールドワークでは平和案内人の方々の案内により、実際に被爆した建物などを見学しました。私達の班は、主に浦上天主堂や山里国民学校へ行きました。浦上天主堂はキリスト教の教会で、30年をかけて建てられましたが、わずか20年で原爆により破壊されました。現在の浦上天主堂には当時の鐘楼が残っており、私はこんなにも大きなものが飛ばされてしまうなんてと、とても驚きました。浦上天主堂には他にも破壊された像などがあり、とても怖かったです。頑張って建てた教会が一瞬にして消えてしまっ、当時の人々はどんな思いだったのか気になりました。山里国民学校では、あの子らの碑と防空壕をみました。当時、この学校には約1600人がいましたが、原爆でおよそ1300人ものが亡くなったそうです。この話を聞き、やはり原爆はとても恐ろしいものなのだと再認識しました。他にも永井隆記念館というところでは、被爆者になりながらも17冊もの本を書き、原爆や戦争の恐ろしさを伝えてきた永井隆博士について学びました。私は、永井隆博士の思いが世界中に伝わることを願っています。



同日に行われた青少年ピースフォーラム1日目では、最初に、当時12歳だった山田さんの被爆体験講話を聞きました。山田さんには、太平洋戦争の当時の詳しい様子や、原爆落下時の様子を教えていただきました。実際に被爆した方のお話を現地で聞き、原爆や戦争の恐ろしさについて改めて実感し、そして絶対に戦争を起こしてはいけないということを学びました。その後、ピースボランティアの方々の案内で、原爆落下中心地や平和公園内を見学しました。

3日目には、平和祈念式典に参列しました。長崎に原爆が落下してから今年で77年となり、浦安市平和使節団が式典に参列するのは3年ぶりでした。コロナウ

イルスの影響で平和公園に行く組と出島メッセ長崎に行く組に分かれて参列をしました。私は、出島メッセ長崎での参列となりましたが、長崎市長や被爆者代表の方のお話を聞き、平和への思いや願いを感じ取りました。その後、出島メッセ長崎で青少年ピースフォーラム2日目が行われ、全国から集まった小中学生と戦争や平和をテーマにした意見交換が行われました。様々な意見を聞き、印象に残っているのが「互いの意見を尊重し合う」ということです。テーマについて話し合う中で、特に多かったのがこの「互いの意見を尊重し合う」という意見で、争いをなくすためにはこのことを大切にして話し合いをすることが必要なのだと思いました。平和祈念式典とピースフォーラムで「千羽鶴」という曲を聴きました。この曲は、平和への思いが込められて被爆50年の時に作られました。この曲を聴いたときになんとも言えない思いがこみ上げてきたのが印象に残っています。

この長崎派遣を通して私が一番伝えたいことは、長崎を最後の被爆地にしなければならないということです。様々なお話で聞いたこの「長崎を最後の被爆地に」という言葉は被爆者の共通の一番の想いだと私は思います。最初の被爆地はずっと広島ですが、最後の被爆地は変わってしまう恐れがあります。唯一の被爆国である我が国の長崎を最後の被爆地にするためにも核兵器は廃絶されなければいけません。被爆者の平均寿命は80歳を超え、当時の様子について話せる人が減ってきているこの現状を真摯に受け止め、今度は私たち若い世代が後世へ伝えていく番だと思います。『平和を守り、維持する。』『微力でも、私たちに出来ることはある。』私はこの貴重な経験を存分に活かして戦争や平和の尊さを周りの人や次の世代に伝えて行きたいと思っています。



倒壊した浦上天主堂の  
旧鐘楼の瓦礫



平和案内人による班別フィールドワーク

1945年、8月9日に長崎に原爆が投下されたことは、学校や親から教わりました。

戦争があったこと、大きな被害が生まれたこと、言葉で聞くだけでも恐ろしいと思いました。原爆について、あまり詳しい事は知りませんでした。できるだけ目を背けていたいと思っていました。然し、平和のために自分ができることをしたいと思い、平和学習に参加しました。

長崎の地には、今でも原爆の悲惨さを教えてくれるものがあらゆる場所にありました。爆風により半分が壊されてしまった鳥居、飛ばされた石が穴にはいった木、爆風に加え熱風で崩壊してしまったキリスト教の教会など、原爆の爪痕が残された多くのものを見る度に77年前にこの地で起きた惨禍を想像しました。さらに、原爆にまつわる長崎市内のモニュメントには水が使われているものが多くありました。なぜ、水が使われているものが多いのか。それは原爆が投下された時、被爆者の多くは水を求めて亡くなっていったそうです。そうしたことに由来して長崎市内のモニュメントには水が使われているものが多くあるのです。そうした意味を知り、水を求めて亡くなっていった方々の気持ちを想像しました。また、長崎市内には今も原爆当時の地層が地面の下に埋まっているのだと聞きました。そういったことを長崎の地で学び、感じ取り、次第にこの惨禍を、もう二度と起こしてはいけないと思うようになりました。

恒久平和を祈念する平和祈念式典では、被爆者でつくる合唱団の「被爆者歌う会『ひまわり』」の合唱が被爆者の高齢化や減少から今年が最後となってしまふと聞きました。被爆者が徐々に少なくなっている今、原爆の悲惨さを後世に伝えるのは我々のような若者の役目だと感じました。私が平和学習で学んだことを少しでも周りの人に伝えたいと思ったきっかけになりました。

ピースフォーラムでは、日本各地の学生と平和や戦争について意見を交わしました。ケンカや戦争はなぜ起きるのか、そしてどうしたらなくせるのか。一見、単純な質問のように思えますが、平和を祈る仲間たちと意見を交わすとさまざま



な意見が飛び交い、考えも一人ひとり違っていました。多くの人と平和や戦争について考えを共有することで視界を広げ、互いの、平和や戦争についての考えを広めていけるのだと思いました。もっと多くの人と平和や戦争について意見を話し合い、少しでも平和への思いを広めたいと思いました。

長崎に実際に行ってみることで、ただ学ぶだけではない深い学習ができ、さらにその地から当時の惨禍を感じ取ることができました。長崎で戦争や原爆の歴史から平和の尊さを改めて確認し、決して第3の被爆地をつくり出してはならないと強く感じました。今、私が平和のためにできる事は決して多くはないかもしれませんが、この経験を通して周りの人に原爆や戦争の実相や歴史、平和の尊さを伝え、少しでも多くの人に考えを共有したいと思います。また、これからも平和のために何ができるのかを考え、私にできることを積極的に取り組んでいきたいと思っています。

今、起きているロシアによるウクライナへの侵攻を見て、改めて平和の尊さを再確認する必要があると感じました。また、ロシアのウクライナ侵攻だけでなく、世界で起きている紛争や内戦を知ることで、どうすればより平和な世界をつくれるのかを考えることにも繋がりたいと思っています。

私はこの平和学習に参加するまで「平和」についてあまり深く考えたことがありませんでした。「平和とは何なのだろうか」この答えを長崎への派遣を通して自分なりに考えてみました。平和とは戦争や原爆などの歴史を活かし多くの人々が幸せに生きる世界だと考えました。そのような世界を少しでも実現するには、歴史を知り、自分の考えを広め、少しでも多くの人々が平和への考えを持ち、平和を目指すことが大切だと考えました。改めてこの経験を将来でも活かしていきたいと思いました。



平和の泉



青少年ピースフォーラム意見交換

今年5月、学校から『浦安平和使節団』として長崎へ行く話を頂いた。8月に開催される『青少年ピースフォーラム』に参加し、被爆地を実際に訪れ、平和について考えを深める目的の派遣事業だと聞いた。浦安市は昭和60年3月29日に『非核平和都市』を宣言して以来、様々な非核平和事業を行ってきたそうだ。



私はその話を頂いた時、正直「本当に自分にその資格があるのだろうか」と思ってしまった。浦安市が『非核平和都市』を宣言していることは知っていたし、小学校でつくしの会の皆さんの朗読劇を聞く機会もあった。しかし、自分が実際に被爆地を訪れる日が来るとは予想もしていなかったし、そこまで深く理解していた自信がなかったからだ。

そんな気持ちを持ったまま事前オリエンテーションに参加することになったが、市内中学校の同年代の参加者と原爆について学習したり、長崎訪問の準備を進めるうちに、普段から「平和とは何か?」ということを漠然と考えるようになっていた自分に気が付いた。

8月7日、羽田空港から長崎県へと出発した。長崎はとても暑く、浦安とはまた違う空気に、遠い地へ来たという実感が湧いた。城山小学校で見た迷彩柄に塗られた校舎や立派な嘉代子桜。平和公園で見た平和の祈念像には、右手、左手、目、足、全てにそれぞれ意味があることを知り、被爆した際「50年は草木も生えん」と言われた地には緑が多く感動した。原爆で水が飲めずに亡くなってしまった方が多くいたため、長崎には平和の泉を含めて水のモニュメントが多いということにも、平和を願い、込められた想いを感じた。

8月10日、4日ぶりに帰宅した。長崎で経験したことを家族に話し、録画していたNHKの平和祈念式典を観た。会場の様子、『千羽鶴』や『あの子』の合唱、来賓の挨拶等、当日遠くて見えなかったものや聞き取りにくかったことがよく分かった。

また、取ってあった新聞には、長崎原爆の日に関する記事が沢山載っていた。その中に、水を求めて亡くなった原爆犠牲者に桶の水を捧げる『献水』を式典で務めた、被爆者代表の中尾百合子さん(90歳)のことが印象的だった。当時13歳だった中尾さんは、臨月だった母を亡くし、弟3人と生き延び、戦争から帰

った父と共に戦後50年まで毎年欠かさず式典に参列したそうだ。「大切な人の命や人生だけでなく、若い人の未来までも奪う戦争だけは絶対にあってはならないのです」という言葉で記事は締めくくられていた。式典で物静かに献水をしていた方とは思えない、強い意志を感じる言葉だった。

そして、自分が平和使節団として派遣されたことがきっかけで、以前平和公園の近くに住んでいた母の知人の話も聞く機会があった。長崎県の小中学生は、毎年夏休み中の8月9日は、平和について理解を深める取り組みを行う登校日と決められているという。式典で歌われた永井隆博士作詞の『あの子』も授業で習い、誰もが歌えるのだそうだ。広島や長崎の子供達の平和教育は、他の都道府県とは根本的にレベルが違うと言っていた。被爆地で生まれ育った人と、浦安で生まれ育った自分では、育った環境の違いは否めないが、少なくとも、長崎から帰ってきた自分は、5月に自信のなかった自分よりも平和について学び、経験をし、成長出来たように思う。このように、実際に足を運んで得た経験に加え、テレビや新聞や人から聞いた情報によって、さらに平和への理解を深めることが出来た。

8月28日、『浦安市平和シンポジウム』が開催され、長崎での研修報告や朗読劇を行った。また、ウクライナからの避難民の方々を囲んで、現在起きているロシアのウクライナ侵攻の状況や、日本での生活の様子等、生の声を聞くことが出来た。「戦争は沢山の苦しみと被害を与えるということを知ってもらい、繰り返さないようにしてもらいたい」という話を聞き、起きた場所や年代に関係なく、戦争は苦しみや悲しみを生むだけの愚かな行為であり、二度と繰り返してはいけないものだということを強く感じた。まずは身近な人達へ原爆の恐ろしさを伝え、戦争のない平和な世界を創ることに少しでも貢献していきたいと思った。



平和祈念像



第1回オリエンテーション

八月六日から八月十日にかけ、私は平和使節団の一員として長崎に向かわせて頂きました。四日間を通し戦争や原爆、平和について考える機会を多く頂き、自分なりに考えることができたと感じます。その中でも、私が特に印象に残っているのは原爆資料館と平和祈念式典、フィールドワークにて回った箇所の三点です。



原爆資料館の見学は、原子爆弾とはどのようなものなのか、長崎に落とされたものはどのようなものだったのか、実際に原爆の被害に遭いどのようなことが起こったのかなど、原爆の詳細と向き合う機会となりました。私は以前から浦安被爆者つくしの会の方々が学校で行って下さる朗読劇や、ニュースなどを通して原爆や戦争について触れる機会がありましたが、それでも具体的な数値や物品を拝見して自分の無知さに気付かされました。原爆が落とされた際に辺りが凄まじい高温になる、ということは知っていましたが、中心部の温度が三千度から四千度に渡るものだとは知りませんでした。そして、被爆直後に死を免れた被爆者の方が水を求めて大変苦しい思いをされた、ということは知っていましたが、その詳しい凄惨さについては理解していませんでした。被爆し捻じ曲がった眼鏡やボロボロになった衣服、溶けた硬貨や動かなくなった時計は、派遣が終了した今でも思い出し、改めて考えさせられます。また、一命を取り留めた被爆者の方の傷がケロイドとなった際の写真や被爆後に実際に治療がなされている写真などを拝見した際は、余りの残酷さに思わず目を背けそうになってしまいました。しかし、原子爆弾はそのような状況を簡単に、沢山の人の生み出してしまふ最悪の兵器であるということを改めて心に刻みつけることができました。

八月九日に行われた平和祈念式典では、私は現地ではなく中継で参列させて頂きました。沢山の人が現地にも中継先でも参列されており、国の境を超えて来られている方も多くいらっしゃったことが印象に残っています。また、被爆者の方が合唱をされた際のこと強く思い出されます。被爆された方の高齢化が進み、凄惨な出来事の生き証人が減少している中でも、必死に原爆の悲惨さ、平和の尊



さを発信しようとするその姿に胸を打たれました。今でも忘れられないその記憶を強く想起させるようなことをすると、精神的な負担も沢山掛かるでしょうし、亡くなられてしまった大切な方を思い出し辛い気持ちになられたりするはずです。けれども、私達原爆を知らない世代や世界にそれを伝えようとして下さるその姿を見習いたいと強く感じました。

フィールドワークでは、原爆の被害を受けた場所を何箇所か回らせて頂きました。その中でも、心を強く打たれたのは平和公園内にある原爆を受けた地層が見られる箇所です。ガイドの方の後につき階段を降りると、厚いガラスでしたが、たった一枚で隔たれた空間がありました。そこには、原爆の被害を受けたことがはっきりと分かる溶けた生活用品やボロボロになった土地があります。長崎の街は今、戦争から時間をかけて復興し、又美しい街並みを再生しています。ですが、それは原爆の被害が帳消しになったということではなく、沢山の被害や悲しみの上に築き上げてきたものなのだと痛感しました。未だ残された爪痕は痛々しく、又その姿をもって私達に戦争の恐ろしさや痛み、原爆の非人道さを語ってくれているように感じます。そして、この痕は消すべきものではなく、私達やその先の未来を担う人達が守っていかなければならないものなのだ、と思いました。

私達の現在の平和というものは、沢山の人の犠牲と涙と苦しさ、そして努力の上に成り立っている尊いものです。その思いは、長崎を訪れてからますます強くなりました。この貴重な経験を最大限に活かし、これからの社会を担う私達から平和について考える機会を発信していくことで、この平和を守れたら良いなと考えています。そして、世界中の一人一人が平和についてできることについて考えて欲しいです。「一人一人の力は微力でも、無力ではない」という言葉が表す通り、私達が力を合わせれば平和は保たれます。私も微力ながら、これから平和の為に貢献していきたいです。



第2回オリエンテーション  
朗読劇の練習



被爆当時の地層（平和公園内）

「八月九日」これは、長崎に原爆が落ちた日です。そして多くの方が亡くなりました。今回、式典やフィールドワークなどに参加し、長崎の人達や被爆者の様々な想いに触れ、自分なりに平和とは何なのか考えてみました。



77周年の長崎の平和祈念式典に参加しました。今までのようにテレビの向こうで見るのではなく、実際に現地に行くと感じたことのない緊張感でした。来賓の方々の言葉はとても重く「二度と原爆を使わないでほしい」という思いが沢山そこにはありました。今でもロシアとウクライナの間で戦争が起こっています。最初はニュースや新聞で話題になっていましたが、時間が経つにつれてこの話題が減り、身近にある戦争という実感が薄れてきています。今、私たちがしてはいけないことは戦争に対して関心を持たなくなることです。関心を持ち続けるには強い意志が必要だと思います。なので一人一人が過去の戦争を知って考えてみてほしいと思いました。

平和公園でフィールドワークに参加した際には、被爆建造物や慰霊碑を見学しながら話を聞かせてもらいました。話の中で「原爆が投下された時、3000から4000度。太陽と同じくらいの熱さだった」これを聞いて正直私は想像が付きませんでした。もちろん、自分が体験した事がなかったからというのもありますが、今、自分が立っている場所で沢山の人がこれを味わったと思うと衝撃を受けました。一命をとりとめた人の中でも、長く健康被害に苦しまれてきた人たちがいます。戦争を起こす方も、被害を受ける方も楽しくないはずで、戦争をなくすのも簡単ではありません。私一人の力では微力ですが、皆さん一人一人が戦争をなくす為にどんなに小さい事でも行動に移していかなくてはいけないと思います。

現代は高齢化が進み、原爆を体験した人の声を聞くことが難しくなっています。その中、被爆者の体験談を聞かせてもらう機会がありました。原爆が落ち、強い光と爆風から残酷な風景を造り上げて、生きたくても生きることを閉ざされ

た人たちが沢山いたかと思うと悲しかったです。怒りもありました。なぜ罪のない人たちがこのような目に遭わないといけないのか。戦争の中で復讐が起きた場合、理由として怒りもあると思います。もしこの怒りに任せて復讐をすれば、同じ光景を造り上げ、涙を流す人たちが増えるだけです。兵士でもなく国の代表でない私たちができることは、どのような戦争があったのか真実を知り、次の世代に伝え、過去の戦争を忘れないことが大切だと思いました。

私の住んでいる地域では、原爆展を開催したり、学校で平和の鐘の音を流したり、平和のまちをテーマにした絵画を募集するなどの活動を行なっています。その中でも、平和学習青少年派遣事業に参加して貴重な体験をさせて頂きました。

「平和とは何なのか」これについての私の考えは「幸せになっていい権利がある」ことだと思いました。世界の人たち全員に家族がいます。今でもご飯を食べられない人や、仕事ができない人がいます。でもこれは当たり前ではありません。私たちが行動を起こせばこの人たちは幸せになれます。戦争もそうです。私たちが終わらせようと思えば終わるはずで、日本は核不使用の歴史を継続して長崎を最後の被爆地としなければなりません。

「長崎を最後の被爆地に」これが私の願いです。



浦上天主堂



青少年ピースフォーラム フィールドワーク

私は初め、平和学習青少年派遣事業に参加することに抵抗感があり、原爆について知ることから目を背けてきました。なぜなら、昔に起きた戦争について知るとは「怖い」という気持ちと原爆について知らなくても日本は安全だからという考えがあったからです。

しかし、派遣終了後の私の気持ちや考えは大きく変わりました。長崎原爆投下が起きた日にちも規模もわからない私にとって、派遣前に行ったオリエンテーションで約七万人もの方が亡くなったという事実を聞いた時には、今でも忘れられないほどの衝撃を受けました。それと同時に激しい胸の痛みと怒りを感じました。なぜ7万人もの方の命が原爆によって奪われなければいけないのかと悔やむばかりです。しかし、悔やんでばかりいるのではなく、原爆について自分事として捉え、後世に伝え続けていくと覚悟を決め事業に参加しました。

私が、この事業の中で特に印象に残っていることは2つあります。

1つ目は、被爆者の方のお話です。当時12歳だった山田さんは一緒にいた友達をなくしたことや、幽鬼のように歩いていく被爆者の群れを見たことなど当時の様子をまっすぐな言葉で私たちに伝えてくださいました。山田さんの表情や話し方からは二度と戦争を起こしてはいけないという強い思いが伝わってきました。

空襲を体験していない私にとって、考えられもしない言葉が並べられた話を聞くたび胸が苦しくなりました。正直に言ってしまえば被爆体験講話の感想は「恐ろしい」です。派遣終了後から約二か月たった今でも、一つ一つの恐ろしい言葉が鮮明に残っています。

しかし私はこの話を聞き、原爆について昔話としてではなく自分事として真っすぐと向き合うことができました。原爆が投下されたことを昔話にしてはいけない、未来に伝えていかなければいけないと私に伝えてくれたのは被爆体験講話でした。

私は被爆体験講話が終わった後に感想を発表した沖縄の大学生の言葉が今でも忘れられません。それは、「人間が人間ではないようなことをした。」という言葉です。私はこの言葉を聞いて鳥肌が立ちました。私と同じ人間が起こした紛れもない事実だということに恐さと悔しさを感じました。同じ人間として、原爆によって人々を殺した事実から目を背けようとするのではなく、起きてしまった事実をこれからの自分の行動に生かしていきたいと思いました。



2つ目は、原爆資料館で原爆について学んだことです。原爆資料館に向かう途中、私はどのような気持ちで当時のことについて知ればよいのかと考えました。しかし、その時オリエンテーションで浦安被爆者つくしの会の会長である宇田川さんの言葉が頭をよぎりました。それは、「五感を使って心で吸収する。」という言葉です。私は自分の素直な気持ちで当時のことを感じようと決め資料館に向かいました。

資料館に入ると恐ろしいようで、温かい空気を感じました。昔起きた出来事から目を逸らそうとするのではなく、心で感じ、心からのご冥福を祈る人々に温かさを感じたからです。

資料を見始めると、言葉では表すことのできない感情に襲われました。これが原爆によって人間が起こした殺人だと信じられない気持ちになりました。資料館には、見ていると気持ちが悪くなってしまおうような写真や絵、実物がありました。しかし、私は怖いという気持ちよりも驚きしか感じられませんでした。感情を心にとどめておくことはできず、表情が険しくならずにはいられませんでした。

私が一番心に残っているのは、11時2分を指したまま止まった時計です。この時計を見たときには、鳥肌が立ち、時間が止まったように感じるほどでした。原爆によって亡くなってしまった方の二度と戦争を起こしてはいけないんだという強い思いが、耳に直接届いてきたようで不思議な感覚になりました。

しかし、その時私は絶対に争いを起こさない、そして原爆について生きている限り伝え続けていこうと決めました。

私は今回の派遣事業を通して戦争の恐ろしさを知ると同時に平和の尊さについて知り自ら考えを深めることができました。私は今まで戦争について知ることは怖いからと目を背けてきました。しかし今では事業に参加してよかったと心から思います。なぜなら原爆について知ることは平和な未来の実現に必ずつながると思ったからです。

平和な未来を実現するために私たちにできることは必ずあります。私は、何事も武器や武力で解決しようとするのではなく、相手と自分を尊重し、認められる人になります。



11時2分で針が止まった被爆時計



被爆体験講話

今回、私は浦安市平和使節団の一員として、長崎へ訪問し、原爆の被害にあった色々な所を実際に見学して、ガイドの皆さんからお話を伺ったり、同世代の人たちと意見交換など大変貴重な経験をさせて頂きました。その中で、とても心に残ったことが3つあります。



まず一つ目、原子爆弾が人に与えた恐怖に関してです。原爆資料館には、原爆の熱によって溶けた瓶の破片や、眼鏡など、多くの物が展示されていました。原爆の熱は軽く千度を超え、落下地点から障害物の無い半径100メートル以内に入った人たちは、皆即死、そして、落下地点の近くの木造の建物は、殆どが崩れるほどとてつもない破壊力だったそうです。

原子爆弾は、一瞬にして沢山の人を殺し、町の建物を消し去った事、即死した人以外にも、多くの人が被ばくし、苦しんだ、という事を知り、思わず鳥肌が止まりませんでした。被ばくした人以外にも、こうして実際の物を見たり、聞くことで、原爆を知らない人たちにも恐怖を与える、原子爆弾は本当に怖い存在だと思いました。

そして、このような事が二度と起こらないように、しっかり考えていきたい。そう考えました。

次に印象に残ったのは、被爆の想いについてです。原爆により、後遺症を負ったり、大切な人たちを失った被爆者の方々が大勢いました。そして、みな「もう、被爆者を作らないで」こう訴えかけていました。

私はこの言葉から、いくつかの意味を感じました。被ばく、という自分たちが経験した恐怖を、二十一世紀を生きている人たちには味わってほしくない。家族を失っただけでなく、時には差別され、罵られる。それは言葉に表せないほどの苦しみで、「こんな思いをするのは、自分達だけで、これ以上同じ思いをする人がいて欲しくない」そう語る被爆者の方の、言葉を考えれば考える程、色々な想いや意味が込められているのだと感じました。

そして最後に、平和に関してです。今、私たちが平和に過ごしているのは、たくさんの人のおかげだと思いました。その中にはもちろん、被爆者の方々もいます。

今、この平和な世界を過ごしている私たちは、本当の意味では原爆の恐ろしさを知りません。ですが、この被爆者の方たちの事を思うと、その思いを自分たちが守り、これから先の人たちにも、伝えていかなければならない、私たちは、この平和を守る義務がある、そう感じました。

私は、今回の派遣を経て、たくさんの事を学びました。それは、原子爆弾以外にも、平和の尊さ、ありがたさ、大切さ、など。実際に、原爆を落とされた原爆ドームを見て、初めてわかる事も多くありました。被爆者の方々の想いを引き継いでいかなければならない、事前に学ぶだけでなく、長崎へ訪問する事で、より強くそう考えました。

コロナで、学校行事での旅行が1泊や日帰りなどになり、同世代との3泊もの旅行は今回が初めてだったので、大変楽しい思い出も出来ました。

長崎でも、他の県の使節団の人たちと交流し、とても楽しく過ごしました。今回の経験を活かし、今後色々な事に取り組んでいきたい、そう思いました。



被爆体験講話 質疑応答



原爆資料館

1945年（昭和20年）8月9日午前11時2分、長崎に原爆が投下されました。原子爆弾による被害状況は長崎人口が約240,000人とすると死者は73,884人、負傷者は74909人と長崎に莫大な被害を及ぼしました。

「私は爆心地に近いところにいました。空襲警報が解除になったので、防空壕の中と外で品物の受け渡しをしている時に原爆にあい、母は防空壕の中で気を失い、外に出ていた弟2人はそれっきり行方不明です。そして、周りを見るとたくさんの方が血を流して倒れています。」



皆さんはこの文章を見ただけでは原爆の怖さというものを感じられないかもしれません。けれど、原爆を作るのも私たちと同じ人間です。原爆を落とすのも私たちと同じ人間です。

私は長崎に行って改めて長崎を最後の被爆地という言葉が浮かびました。今から皆さんに伝えなくてはならないことがあります。長崎の旅、初日はグラバー園に行きました。そこは、長崎の歴史を学ぶことが出来る場所でした。長崎には路面電車というものが走っています。私たちが住んでいる街、浦安とは周りの景色や交通の面でも違うものがハッキリとしていました。

2日目は原爆落下中心地で平和案内人と交流し、ピースフォーラム、コース別平和学習フィールドワークなどを行いました。ピースフォーラムでは実際に被爆した方のお話を聞きました。今でも被爆者の方々は日本にいますが、それほど多くはありません。その中には原爆を思い出したくない、という思いから私たちに語らない方もいます。少しでも私たちに教えてくださる方がいるということだけでもとてもありがたいことだと私は思いました。私のグループは爆心地から平和公園に向かうルートでした。2日目の中で1番印象的だったことは、原爆落下中心地についてのお話でした。原爆が落ちたところの温度はだいたい3,000度から4,000度だそうです。その中人々は必死に生き延びようと近くの川などに水を求めて飛び込みそのまま亡くなった、と聞いた時は背中がゾゾっとしたように感じ



られました。そして、近くにある慰霊碑の中には原爆で亡くなってしまった人々の名前が書かれたものが入っていて、それは毎年8月9日に更新されています。

そして、皆さんにこれだけは知っておいて欲しいことがあります。それは平和記念像が表しているものについてです。右手を上げ、左手は真横に出して、目はつぶっています。この像が意味しているものはあえてここでは明かさないとします。ぜひ、調べてみて、少しでも、長崎についての知識を深めてくれたら嬉しいです。

今現在ウクライナでも同じことが起こっていることは誰でも、知っていることでしょう。私は長崎に行く前も行った後も浦安に避難している方と少しお話をしていました。その方達はとても明るい方々でした。最初、祖国を離れて全然生活も言語も違うところに引っ越すという話が出た時はとても不安だったに違いありません。それでも、私達に爆弾の恐ろしさ、平和の大切さを真剣に語ってくださいました。今では、お仕事も、子供たちの学校も決まり、少しずつ浦安にも慣れてきたのではないかと、感じています。これからもサポートできることはやっといこうと思いました。

改めて、この平和学習長崎派遣事業に参加させていただいて良かったと思いました。そして、とてもいい経験になりました。一緒に行った仲間たちにも感謝しありません。

ノーモア ヒロシマ  
ノーモア ナガサキ  
ノーモア ヒバクシャ  
ノーモア ウォー



平和祈念像



平和案内人による班別フィールドワーク



原子爆弾落下中心地碑  
(原爆殉難者名奉安箱)

私はこれまで、戦争や平和について学校の授業で学ぶ機会はありましたが、特段興味を持ったことはありませんでした。授業で聞いていても、平和な日本において、戦争はあまりにも私たちの生活とかけ離れていて、どこか遠くの話のように感じていたからです。



しかし、今回、長崎研修のお話をいただいたことで、私の戦争や平和について考える第一歩が始まりました。

事前研修では、実際に被爆者の体験講話や、ウクライナから避難された方から話を聞かせていただき、昔の話というだけでなく、今でも世界中では戦争がすぐ身近にあるものだという実感が沸き、恐怖を覚えました。

長崎に行ってみると、これまで資料などで調べていたものが実際に目の前に広がり、さらに戦争や原爆が身近なものに感じました。

中でも、原爆資料館では、原爆被爆者のパネルや、ファットマンの実物を目の当たりにし、その生々しい光景に、私が持っていた戦争への知識の浅さを実感すると同時に、想像していた被害の何十倍もの悲惨さに圧倒され、息苦しさを感ずるほどでした。

フィールドワークでは、実際に原爆で被害を受けた樹木や建物に足を運び、丈夫な建物や、大木がこんなに無残な姿になってしまうのかと、原爆の威力を改めて感じました。

しかし、それとともに被害から再生した大木の姿に、命の強さも感じる事ができました。

平和祈念式典では、まず、その規模の大きさに圧倒されました。そして、たくさんの方がこの式典に関わり、戦争や原爆、これからの平和について世界一丸となって考え、思いをはせる様子に、とても感激しました。七十七年前に起こった悲劇を、二度と繰り返してはいけない。参加者それぞれがいろんな想いを抱えて黙祷をささげていたと思います。

式典の後には、ピースフォーラムで、平和学習を行いました。ここでは、全国

の中学生が集まり、グループで「喧嘩や戦争はなぜ起きるのか」「どうしたら無くなるのか」を話し合いました。皆が自分の思いや意見を言い合い、自分の意見と違う意見もたくさん出ました。それでも、お互いの意見をしっかり聞き、理解し合おうとする姿こそが、平和的解決の第一歩ではないかと感じました。初めて会う人との会話はとても緊張しましたが、同じ目的を持つ仲間として交流を持つ事ができ、とても有意義な時間でした。

百聞は一見に如かず。この長崎研修では、どれもこれも私を刺激する体験ばかりで、目まぐるしく感情が動く毎日でした。同じ目的で集まった仲間とともに数日を過ごした事、実際に目にした戦争や原爆の悲惨さ、被爆体験者の悲しい現実、意見交換の大切さ。これらを通して私が感銘を受けたことで、これからの人生において素晴らしい財産になったことは間違いありません。

平和シンポジウムでの報告会までの時間は、長崎研修を経て、自分には何ができるのかじっくり考えるのにとっても大切な時間でした。

長崎研修を通して、私が遠くの出来事に感じていた戦争についてこんなにも理解を深め、これからは平和について考えられるようになったように、皆にも戦争や原爆について知ってほしい、これからの平和について考えてほしい、そんな思いが込み上げてきました。

そのためには、年々減っていく戦争や原爆の語り部の役割を、私たち若者が積極的に担っていく必要があると感じました。

私たち一人ひとりにできることは微力かもしれませんが、しかし、無力ではありません。二度と同じ過ちを繰り返さないよう、後世にしっかりと語り継いでいくことこそ、平和使節団の使命だと胸に刻み、平和に一歩ずつ近づけるよう活動していこうと思いました。



青少年ピースフォーラム意見交換



平和案内人による班別フィールドワーク

まず始めに、今回この平和研修に参加させて頂き、本当にありがとうございました。私は参加するまでうまくいかない時や嫌なことがあったときすぐにネガティブになったりイライラしてしまったりしてすぐにマイナスな気持ちになっていました。ですが、長崎に行って被爆地を実際に見たり被爆者の方やボランティアの方の話を聞いて、今の生活に嫌なことがあっても感謝できるようになりました。それほどこの研修は私に心に残ることをたくさん教えてくれました。また、この研修で大切な友達がたくさんできました。同じ生徒会の会長や副会長を目指す友達ができてお互いに応援し合うことで頑張る力になりました。



そして今回この研修に参加して、戦争・原爆の恐ろしさを何よりも痛感しました。私の家では戦争の事について話し合う機会も少なくないので、戦争はあってはいけないし、核は絶対に使ってはいけないと感じていました。ですが、実際に被爆者の話を聞いたり、写真や絵を見たりするのは初めてだったので、素直に怖くて、恐怖を感じました。原爆は本当に一瞬でそして少しの差で生死を分けてしまいます。あるボランティアの方からお聞きした話では、3人で並んで歩いていて、原爆が落ちた側の2人は亡くなり、反対側の方は亡くなった2人が盾になって生き残ったと言う話がありました。同じように、ついさっきまで話していた人が、立っていた位置が悪くて亡くなっていたと言う話をいくつも聞きました。

原爆資料館で見た写真や絵は、今も鮮明に記憶に残っています。幽霊のように手を前に出し服のように皮膚がただれている絵、内臓が飛び出たり腕や足がちぎれている絵、背中が真っ赤に火傷している少年の写真。この世界で、実際にそんなことが起こり、多くの方が亡くなりました。このような事は絶対に起こってはいけないと、深く感じました。

ですが今、ウクライナとロシアは戦争していてロシアは原爆の脅しをしています。ロシアの持つ原爆は、日本に落とされた原爆よりも遥かに大きく、死傷者も遥かに増えることとなります。戦争によって、すでに多くの死傷者が出ているの

に、これ以上たくさんの方が亡くなるのは絶対に防がなければいけないと思います。「長崎を最後の被爆地に」たくさんの思いが詰まったこの言葉が、届いて欲しいです。

私が通っている学校では、中指を立てたり、「死ね」と言うなど、人を傷つける言動が当たり前のようにあります。私は、こうして生きていられていることが幸せなのだと、気づけていないのだと思います。こうして私達が当たり前のように過ごしている今も、被爆者の方は原爆の被害に苦しみ、あるいはいつ症状が出るのかと恐怖に怯えて過ごしている人もいますのです。なのでみんなにはその状況を知って欲しい。そして私は伝えていくべきなのだと思います。

事後研修でおこなったシンポジウムで、ウクライナの避難民の方とトークセッションできる機会があり、私は中学生に望むことがあるか、お聞きしました。返答では「戦争について知って欲しい」と仰っていました。「微力だけど無力じゃない」これは高校生平和大使が掲げているスローガンです。少しの力しかないけれど、私もたくさんの方に戦争・原爆の恐ろしさを伝えていこうと思います。そしてまずは、人を傷つける言葉を少しでもなくしたいです。

最後にもう一度、この研修に参加させて頂きありがとうございました。



平和シンポジウム トークセッション



原爆資料館

私は、浦安市平和使節団として、長崎に行き、普段はできない貴重な体験をさせていただきました。長崎に行く前は、「原爆は恐ろしいものだ」という言葉でとどまっていました。でも、実際に長崎に行って、見たり、聞いたりしたことは、そのような言葉にはおさまりきれないものばかりでした。特に印象に残っていることが三つあります。



一つ目は、原爆落下中心地碑についてです。私は着いた時、こんな綺麗で自然豊かな町に原爆が落とされたのが本当なのかと疑ってしまうと同時に、この綺麗な景色を一瞬で破壊した原爆の恐ろしさに胸が締め付けられ、言いようのない気持ちになりました。また、189,063人の死者がいるという真実を聞き、耳を塞ぎたくなりました。平和とは何か、真実を伝えていくことの大切さ、私達ができることは何なのかを改めて考えさせられました。

二つ目は、「旧城山国民学校」についてです。旧城山国民学校は、爆心地から最も近い国民学校です。当時、この国民学校にいた未来ある児童約1,500人中、約1,400人余りの児童が亡くなったと推計されていると聞き、とても胸が苦しくなりました。また、嘉代子桜という木が植えてありました。この桜は、当時兵器製作所に学徒報国隊員として勤務中に亡くなった嘉代子さんのお母さんが、女学生の慰霊のため学校に寄贈したものでした。原爆というのは、人を無差別に殺す、あってはいけないものだ、強く、憤りを感じました。現在も戦争を物語る学校が残っている事実に感動し、いつまでも戦争を忘れない象徴として存続すべきだと思いました。

三つ目は、原爆資料館についてです。原爆資料館には、残った小物や、実際にあった建物の模型などが展示されていました。また、原子爆弾の模型などがありました。それはとても大きく、上空からこのようなものが落ちてくると想像しただけで恐怖におそわれました。また「ガラスの突き刺さった教師の作業衣」がありました。その服はとてもボロボロになっていました。数々の展示品、資料品の

中で最も印象に残ったことがあります。放射線によって障害をもった方々の写真と説明です。「皮下出血が多発した少女」、「髪がほとんど抜け落ちた少女」その写真に映っている少女は私と同じくらいの年齢と思われる方でした。自分と照らし合わせて想像してみると、いかにその時の状況が残酷だったことがわかりました。他にも写真がおいてあり、その説明には、「放射線を浴びたという理由で職場を辞めさせられた。そのため名前を替える人もいた。」と書かれていました。その方々の気持ちになって考えると、とても辛くなりました。

私はこの長崎派遣を通して、今までに感じたことのない恐怖心を覚えました。戦争はどこか過去のものであり、自分には関係のないことだと思っていました。しかし、今回の長崎派遣で「戦争の恐ろしさ」を伝えていかなければならないと強く感じました。今、この世の中は「平和」ということができるのでしょうか。ロシアとウクライナの戦争をどこか他人事だと思っていないのでしょうか。原爆を受けた方が少なくなっている今、私は目で見て耳で聞いたことを発信し、自分達の世代に伝えることが今の自分にできる大切なことだと思いました。一人一人がより多く発信し、大きな力となって、平和の道へつながることを願います。



旧城山国民学校校舎内

被爆者の衣服

私は今まで戦争についてあまり知らなかった。だから実際に長崎に行って戦争、平和とはなにか考えたいと思うようになった。しかし、いざ長崎へ行くと私が想像していたものとは全く違ってとても悲惨なものだった。

2日目に当時12歳だった被爆者の体験講話があった。11時2分に原爆が落とされてから太陽がきのご雲におおわれ、夕方のように暗くなったそうだ。当時、爆心地は約5,000度で太陽と同じ温度だったため、爆風よりも熱によって溶けて亡くなる人が多かった。背中が焼けてだれてぶら下げながら幽鬼のように歩いていく群れを見ていた。黒ずんだ油が浮いている川でも水を求めてたくさんの方が飲みに行った。それにより、橋では川の水が流れなくなるほど亡くなった人がいた。もう死んだ赤ちゃんをずっと抱き続けるお母さんもいた。

このような話を聞き、聞いているだけなのにとても恐くなった。当たり前のように暮らしていた毎日が急に奪われてたくさんの方が亡くなったということが実際にあったと思うと、今生きているだけで有難いことなのだと気付かされた。

3日目に平和祈念式典に行った。そこでの話で被爆者の方は「二度と私のような人をつくらないで」「どんな事があっても核兵器を使わないで」と全身全霊で叫んでいた。また、被爆者による合唱があった。被爆した方は家族が目の前で亡くなったり、後遺症が残ったりなどつらい思いをして、思い出したくもないに違いない。だが歌うことによって原爆について知らない人にもどれほど悲惨だったかを伝えてくれることに、言いようのない有難さと同時に胸が締め付けられる思いになった。合唱を聞いた時、原爆の恐ろしさ、今生きていることの大切さを歌っているように感じた。それがとても心に響き涙がとまらなかった。歌詞には原爆を体験したつらい思いがたくさん書かれていた。青い空さえ悲しみの色、いのちも愛も燃え尽きた、あの忌まわしい日、そして、もう二度と繰り返さないでと。私は空が青く晴れている時は気分も明るくなって大好きだ。だがそんな空も





被爆者にとっては原爆を思い出させる悲しみの色。私はそれが許せない。

何の罪もないひとが殺され、被爆者は、今までのように生きられなくなってしまっている。核兵器を使ったことで、こんなにも人生が狂わされて人に話すとそれだけで差別され、隠して生きていかなければならず苦しんでいるひとが大勢いる。戦争はいつも私たち市民社会に暮らす人間を苦しめる。こんなことが二度と起きないように長崎を最後の被爆地にするべきだ。

平和とは何か。平和とは、大好きな友達と休み時間に笑いあって話すこと。大好きな家族と、1日あったことを口々に話しながらおいしいご飯をおなかいっぱい食べること。兄弟とふかふかのベッドで眠ること。そういう当たり前の日常だと思う。それらの平和な日常が一瞬にして奪われた長崎。戦争があると死者がでて悲しい思いをする人が出てきてしまう。世界が平和になってみんなが幸せになるには戦争をしないことが重要だと思う。平和に導くためには、他人の意見を否定するだけでなく、互いを尊重し相手の意見を聞いてみるのが大切だ。そして戦争での悲惨な出来事について知り、常に関心を持ち続け考えていくことだ。

私はこの夏の体験で様々なことを学んだ。争いを無くすために一人一人が相手を思いやり、国と国が仲良く平和になる日がくればいいのにと願っている。だから原爆の恐ろしさを忘れられてしまうことが無いように伝承して生きていく。そしてこの思いと戦争を無くすためにどうすべきかの課題を次世代に提議していくことが、この夏平和使節団として経験させていただいたことの責務であると強く感じている。



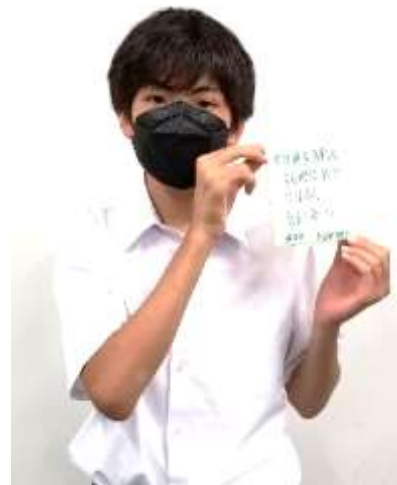
平和祈念式典 「被爆者歌う会ひまわり」合唱



被爆体験講話

私は、8月7日から10日にかけて浦安市平和使節団として長崎に派遣されました。

初めて長崎派遣事業の存在を知り参加したいと思った頃は、長崎への原爆投下のことについて、テレビや本、学校の教科書などでしか学んだことがなく、自分が長崎へ派遣された時、何ができるのか、派遣を通して何を学ぶことが出来るのか、などと思いました。



だからこそ被爆地である長崎へ行き、原爆投下のことや戦争について知りたいという気持ちで長崎派遣事業に立候補しました。

長崎へ派遣される前に、2回のオリエンテーションを行いました。このオリエンテーションでは「被爆者つくしの会」という被爆者の方々や、ウクライナから避難してきたの方々などに、原爆の恐ろしさや戦争をすることの愚かさなど、自分たちは知らない、当時の人にしか分からないとても貴重な言葉を聞き、長崎への関心がさらに深まりました。

そして、長崎へ派遣され、実際に原爆が落とされた長崎市へ訪れると、そこは多くの山で囲まれていました。山で囲まれていたため、熱線や爆風が山により遮断された結果、広島よりも被害が小さかったようですが、77年前、この地で多くの人々が犠牲になったと思うと胸が引き裂かれそうなくらいの悲しみでいっぱいでした。あの日、1つの原子爆弾という兵器により一瞬にして街が焼け野原となり、多くの尊い命が奪われた事は私たちには想像もつかない出来事です。

実際に原爆資料館へ行くと、当時、原爆による熱で変形した瓶や、被爆した方々の写真があり、見ているだけで胸が締め付けられるような感覚でした。なぜこんな残酷なことが起きてしまったのか、もうこのような惨禍を二度と繰り返してはならないと感じ、平和とは何か、世界中の誰もが納得できるような平和な世界はあるのかなど色々なことを考えさせられました。しかし、一人一人の考えや主張は違うことから起きてしまうことなのかなと思いました。だからこそ、他人の意見も受け入れ、尊重し合い、みんなが平等な世界を作り上げていけば戦争をなくしていけるのではないだろうか。戦争などせずに物事を解決する方法は沢山あるのです。

自分は平和祈念式典を中継場所の出島メッセで見っていました。式典では長崎市

長さんや岸田総理、被爆者たちの言葉はとても重く戦争の恐ろしさや当時の原爆が及ぼした人や街への被害などを物語っていました。話を聞いているだけでこんなに被爆者の言葉だけでその人たちの感情や悲しさが伝わったのは生まれて初めてでした。本当に戦争は悲しく、残酷なものだと感じました。被爆者歌う会「ひまわり」の皆さんによる『もう二度と』はとても胸に刺さりました。歌声を聞いているだけで当時の悲惨さや、被爆者たちから私たちに伝えようとしていることが分かりました。

この平和祈念式典を機に、長崎で実際にあったこと、77年前多くの命がたった1つの原爆によって奪われたことを自分の心の中で留めるのだけでなく、家族、友達、地域の人などの多くの人に伝え、このようなことがあったことを永遠に伝え続けていこうと決心しました。

今私たちがこのようにして平和に、元気に暮らせているのは戦争を経験した人、被爆した人達などの「もう、絶対に戦争をしては行けない、原爆によって犠牲になる人を作ってはいけない」と、この77年間伝え続けたから今私たちは平和に暮らせているのです。

世界でも、色々な争いなどによって人の命は奪われています。どのような争いであっても命が奪われていることには変わりありません。命は絶対に他のものに変わるものではありません、一人一人が他人の意見を理解し、互いに意見を尊重し合うことで平和な世界を作ることが出来ると思います。争い、武器を使って物事を解決するのではなく、意見、自分の考えていることを相手と話し合い物事を解決していくのです。

『物事を解決する時は武力ではなく話し合い』を胸に日頃からの日常生活や、これからの社会を明るく世界中の人が幸せに暮らせる世界を作っていきたいです。



平和祈念式典中継会場  
(出島メッセ長崎)



第2回オリエンテーション  
ウクライナから避難されたの方との懇談

私は「平和学習青少年派遣事業」に参加し、多くのことを学びました。また、この四日間はとても貴重で充実した日々でした。

私が心に残った活動は主に四つあります。一つ目は、二日目に行った班別フィールドワークです。三班に分かれ、それぞれ違う場所を見学しました。私



の班は、原爆落下中心地碑、城山小学校などを見学しました。原爆落下中心地碑には、毎年原爆で亡くなった人達の人数が更新されています。毎年どんどん増えていると考え、多くの方が亡くなったとわかると共に、とても心がしめつけられるような感覚になりました。城山小学校を見学した際は、原爆が投下された後の写真や絵などがたくさん並んでおり、とても辛い気持ちになりました。当時、児童らは約千五百人いましたが、千四百人の児童らが亡くなったと聞きました。原爆が投下されたとき校長室で会議をしていた荒川教頭先生は奇跡的に助かりました。原爆が投下されても、学びたい、友達に会いたいという児童たちの思いに荒川教頭先生は心を動かされ、その年の十一月から職員と児童で学校を再開することができました。その諦めない強さにとても感動しました。

二つ目は青少年ピースフォーラムに参加し、実際に被爆した方の被爆体験講話を聞いたことです。実際に聞いていると、当時の恐怖や緊迫感が伝わってきました。その方の言葉の最後に、「戦争だけはしてほしくない」という願いが込められていて、戦争の怖さを知っているからこそ、このように強く願えるんだなと感じました。

三つ目は平和祈念式典です。私は、八月九日に行われた平和祈念式典に参列してきました。折り鶴をかけたときに、改めてたくさんの方が亡くなって、数えきれないほどの人が辛い思いをしたんだなと実感しました。被爆した人達の合唱には「もう二度と戦争はしてほしくない」という願いが込められてあり、とても心に響きました。

四つ目は三日目に行った青少年ピースフォーラムです。三日目では、班に分か

れて意見交換を行いました。「ケンカ、戦争はなぜ起きてしまうのか」「ケンカ、戦争はどうしたらなくなるか」という二つのテーマがありました。前者では、相手の立場になっていない。話し合いではなく、武力で解決しようとする、差別、個性の尊重ができていないなどができました。私はこの意見交換を通じて、相手を思いやることがどれほど大切かということを知り、自分たちにできることがたくさんあるということを知りました。そこから、私は「相手の立場になる」ということを今後心がけていこうと思いました。普段、相手の立場になって発言できていないと感じる場面があります。「自分の発言は大丈夫だろうか」「相手を傷つけてしまう発言ではないか」と考えてから発言することでトラブルが減ると思います。どの場面にしてもこのことはとても大切なことであるため、意識して生活していきたいです。今回、平和学習に参加して、「戦争、平和とはなんなのか」「命、平和の尊さ」について色々な事を考え、学ぶことができました。実際に被爆した方の講演を通して、「戦争はしてほしくない」という言葉が今も心に残っています。当時、家族や友達をなくした悲しみは私にはわかりません。しかし、この戦争の話を語り継ぎ、平和の大切さについて広めることはできます。今回学んできたことを、家族、友人、先輩、後輩に伝え、自分たちにできることはたくさんあると知ってもらいたいです。周りの人に伝えていくと共に、自分にもできることを調べ、実践し、少しでもトラブルが起きてしまう原因を減らしていきたいと思っています。「長崎を最後の被爆地に」という言葉を後世に伝えていき、これからの未来に戦争が起こることがなくなるよう願っています。



旧城山国民学校校舎内



平和公園 千羽鶴献納

私は、八月七日から八月十日にかけて、浦安市平和使節団として長崎市を訪問し、平和の尊さについて学びました。そこでは、被爆者の方の苦しみの体験談を聞かせていただいたり、原爆資料館で、焼け焦げた人々の写真を見たりと、到底人の世とは言えない被爆の実態について、体験してきました。



まず一日目は、グラバー園を見学しました。そこでは、当時では数少なかった外国人の暮らしがどのようなものであったかをうかがい知ることができました。建物は広く大きく、デザインも、洋風で豪華なものでした。そして庭の池には鯉がたくさん飼われており、和風だったことから、当時の外国人は、日本的文化の良いところを取り入れようとしていたのではないかと思いました。

二日目の午前中には、現地の平和案内人の方と一緒に、長崎市内の歴史的建造物を見学しました。

平和公園では、たくさん平和への想いが詰められていました。入口には、燃え盛る炎をイメージした床のタイルに囲まれた平和の泉がありました。そこでは、透明で透き通った泉の水が、炎の中の希望のように見えました。そしてその奥には、十六か国から贈呈された平和のモニュメントが並んでおり、世界中の平和への願いを感じることができました。さらに奥に行くと、平和祈念像がありました。

平和祈念像は、今回の長崎派遣で、私の中で一番記憶に残っています。まずは、祈念像のポーズです。右腕が天を指していて、左腕は地面と水平に伸ばされ、目を閉じていました。右腕は原爆の恐ろしさを、左腕は平和への願い、そして、閉じた目は亡くなられた方々へのご冥福をお祈りしている様子を表しているそうです。私は、今まで画像などで見てきた祈念像から、迫力や偉大さが感じ取れるものだと思っていましたが、実際にこの目で見てみると、迫力や偉大さよりも、静かな祈りが伝わってきました。

長崎原爆資料館では、人の焼け焦げた写真や、崩れた建物など、「もっと詳し

く知りたい」とは絶対に感じることをできないような場面がたくさんあり、見ていて苦しい以外の何物でもありませんでした。

大浦天主堂に行ったとき、何トンもあるという屋根が、爆風によりそのまま落ちたという話をきいて、「人間だったら・・・」と考えると恐怖を感じました。

三日目は、平和公園で行われる平和祈念式典に参列しました。そこでは、平和への願いが込められた合唱を聴いたり、被爆者の方や、遺族の方、岸田総理らのお話を聞きました。緊張感に包まれた場ではありましたが、人々の「平和」への強く真っ直ぐな思いが私の胸に響き、自分も、「平和」への想いがより強まった気がしました。そしてその日の午後は、青少年ピースフォーラムの二日目で、出島メッセ長崎で、全国各地からきた同年代の人たちと、喧嘩や戦争の原因について話し合い、皆で平和について意見を交わしました。

四日目は、長崎県立歴史文化博物館を見学し、当時の人々の暮らしや様子について学びました。

原爆は、悪いことをしたわけでもない長崎の人々だけでなく、当時長崎で生活していた外国人でも、無差別に殺しました。私は、長崎に実際に行って平和について学ぶことで、「原爆は恐ろしい」と知っているだけではだめなんだと思いました。

浦安の内田市長が結団式の際に言っていた、「率直な感想」は、「できれば知りたくはなかった」ということです。でも、平和への想いが人一倍強くなった今、私は、皆で原爆の辛い思い出や人々の苦しみを分かち合い後世に伝えていきたいと思いました。そして私は、「今の平和を大事に生きていきたい」と思いました。



平和祈念像



歴史文化博物館

私は、このたび、浦安市平和使節団として長崎市に派遣されました。その3泊4日の時間で平和についてたくさんのことを学び、その尊さを知りました。これから私が長崎市で見たこと学んだことを話します。

まず、長崎市へ派遣前、私は学校の授業以外で戦争、平和について考えたことはほとんどありませんでした。ところが現地に行き、実際の原爆投下後の町の様子や焼けただれた人々の写真を見て、人生でこれほどなにも言えない気持ちになったのは初めてでした。

また、班別フィールドワークでは平和案内人の方の案内の元、4ヶ所回りました。そのなかで一番印象に残っているのは旧城山国民学校です。旧城山国民学校は爆心地から500m離れた場所にあり、そこは原爆投下により半壊されました。ですが今は城山小学校という形で児童が元気に登校しています。平和祈念館では当時の生活や状況を表す絵が飾られており、その状況は悲惨なものでした。風邪を引いてはいけな、学校は使えないため外で授業をする、今では考えられない状況でした。

次に2日目、3日目の青少年ピースフォーラムについてです。2日目は被爆体験講話を聴きました。私がお話のなかで特に印象に残っているのは、体験談を話して下さった山田さんの家に全身血だらけの看護師さんが来て「水…」と言いながら絶命したことです。きっと最後の力を振り絞り家までやって来たのでしょう。私はそのときに遺憾を覚えました。そして核兵器廃絶への気持ちがいっそう強まりました。

3日目は、午前中に出島メッセ長崎から平和祈念式典の中継を見ました。そのなかで特に印象に残ったのは被爆者代表の方のお話です。その方は被爆し、今は癌が悪化していると話していました。そのときに私は「原爆はその瞬間にも絶大な被害をもたらすけど、その人の人生に一生つきまとうんだ」と思いました。私は被爆していません。その人の苦しみを言葉でしか理解することができません。しかし、その人たちが共通して話していることは「長崎を最後の被爆地に」です。だからこそ被爆者の方の想いも受け継ぎ、これから核兵器廃絶に向けての努力が必要になると強く思いました。また被爆者合唱は歌詞一つひとつに意味があ

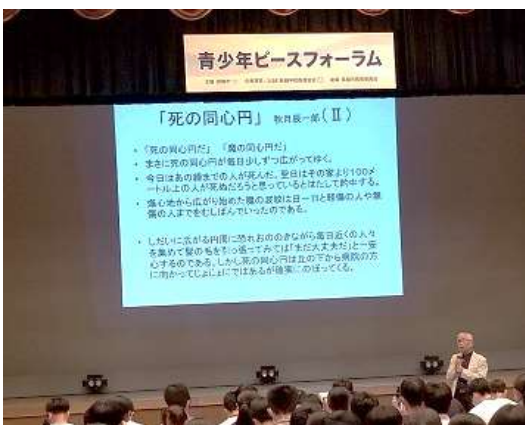




り、被爆者の平和を訴える気持ちが胸に刺さりました。

次は、午後からの参加型平和学習について話します。そこでは他県から同じ平和使節団として集まった同志が、喧嘩が起きる原因は何か、また、喧嘩をなくするにはどうしたらいいか話し合いました。そのなかででた意見は、喧嘩が起きる原因は自分勝手な行動、さらには相手に対する嫉妬などがあげられました。戦争が起きる原因は貿易の不都合や領土問題があげられました。どれも共通しているのが相手の気持ちを考えずに行動しているということです。相手の気持ちを考えることは一見簡単に見えますがとても難しいものです。その一人ひとり、各国各国が少しずつそのことを理解して実践できれば核兵器廃絶に一步近づくとおもいます。

私はこれまで戦争と平和について考えたことがありませんでした。ですがこの4日間で大きなものを学びました。それは今の日本は平和であることや核兵器廃絶は恒久平和に繋がるということです。今の日本は、戦争もせず平和であることに気づいていない人もいます。だからこそ私たちの4日間は生きています。今世界は核兵器の危機に直面しています。恒久平和を目指す世界にとって絶対にあってはならないことです。私たちの使命は戦争の悲惨さと平和の尊さを私たち第三世代に伝えていくことです。次代を担う私たち青少年が戦争の悲惨さと平和の尊さを理解していないと意味がありません。今回学んだ4日間は私にとってとてもいい経験になりました。中には息が詰まるものがありました。戦争と平和について深く考えさせられるものでした。最後となりますが、一番必要なのは伝承だと思います。戦争と平和についてすこしでも理解している我々が学校を越えて伝えて行くことで恒久平和に一步近づくとおもいます。私のできることは微量ですが少しでも力になれるよう勤めていこうと思います。



被爆体験講話



青少年ピースフォーラム意見交換

## 非核平和都市宣言

真の恒久平和は人類共通の願いである。しかしながら、核軍備の拡張は依然として続けられ、世界平和に深刻な脅威をもたらしていることは、全人類のひとしく憂えるところである。

わが国は、世界唯一の核被爆国として、また平和憲法の本質からも、再びあの広島・長崎の惨禍を絶対に繰り返させてはならない。

私たち浦安市民は、日本国憲法に掲げられた恒久平和主義の理念のもとで“緑あふれる海浜都市”づくりを進めており、その実現もまた平和なくしてはあり得ない。

私たち浦安市民は、被爆40周年の節目にあたるこの機会に、非核三原則が完全に実施されることを願いつつ、すべての核兵器保有国及び将来核兵器を所有しようとする国に対し核兵器の完全禁止と廃絶を希求し、世界の恒久平和確立のため、ここに「非核平和都市」となることを宣言する。

昭和60年3月29日

千葉県浦安市